

高等学校における詩の指導

—現代詩教材による自主単元編成の可能性とその試み—

川 越 勇 二

一、はじめに —実践の動機—

授業の場で詩教材を取り扱った際に、何かが「すりぬけて」いくような気がしてならない。授業の後、何かしら寂しい思いが残る。手ごたえといったものが感じられない。今の授業でいったい、生徒は何を学んだらうか。生徒も私も「詩」に触れたのだから。そんな思いにとらわれてしまう。

生徒と教材と私の間に、ある「よそよそしい」空気が充満することもある。それが、私たちの自由な行き通いを遮っている。

「結局はおまえの準備した解釈があるのだらう」という生徒の冷たい視線を感じながら、そうした彼らの意識を打ち破るだけの授業力のない自分に歯がゆい思いをしてきた。生徒の感想を起点に授業を組み立てても、私が急に生徒の高みに登ってしまうと、その後の授業は今一つ盛り上がらない。

このような私の詩の授業を振り返ってみれば、つぎのような願

いと問題点が指摘できるだろう。

生徒と共におもしろがりたい、ということ

生徒の心に響く詩が教科書に少ないということ

明確な目標にもとづく教材編成が有効なのではないかということ

以上のような点を実現し、また克服するために私は「教えたこと」を「教えた詩」で教えることから始めようと思った。今紹介する実践は、こうした私の詩の教室の現状を打開するためのささやかな試みである。

二、単元「ことばの実験室—現代詩の世界」実践の報告

現代詩の授業の場合、生徒にどのような力をつけることが目指されるのだろうか。それは、端的に言えば、状況を見つめる目（現実認識力）と虚に遊ぶ心（想像力、感性の耕し）の育成である。詩は、現実の本質を暗喩的に認識させる力をもっている。

これらの力は、生徒が現実を生きる武器となる。また、生徒のこ
とば意識を磨き、ことばと関わっていく態度を身につけさせるこ
とも、詩の授業の持つ独自の目標と言えるだろう。これらの目標
を達成するために、現代詩の授業では、なるべくたくさんの方に
触れる機会をつくり、生徒と詩との出会いをしくまなければなら
ないだろう。

また、現代詩を授業で教える際には、次のような授業展開を心
がけた。

○教材の特質に応じた授業展開―展開法、順序法、ことばかく
し、グループ学習、朗読中心など。

○生徒を詩に出会わせる手だてを工夫する―初読の感想、生徒の
話し合いを軸とした授業、イメージを重視する。

○余裕ある場の設定―生徒の多様な読みを保証し、生徒と教師が
同じ地平にたった授業。

○いたずらに詩をきりきざむのではなく、素材の良さを生かした
授業。

○生徒の詩作品の距離を確認する。
○楽しい授業、活動的な授業

以下に、実践の概要を示す。

1、単元名 「ことばの実験室―現代詩の世界」

2、対象 宮崎県立小林高等学校普通科三年七組（男子九
名、女子三九名。文系クラス）

3、実施時期 昭和六二年七月

4、目標 ア 詩的言語の特徴をとらえ、その魅力に触れる

ことで、散文的言語と異なる新たなことばの
一面に目を開かせる。

イ 現代詩にみられる詩人のことば意識に触れる
ことで、人とことばとの関係について考える
態度を育てる。

ウ それぞれの詩の特性に応じた読解の力を育て
る。

5、教材編成（◎は主として扱った教材）

第一時（レトリックの魔術師、藤富保男）

「ほんとう」（藤富保男）◎「ぼくの背後」（〃、エッセ

イ）「土」「べ」「顔」「あ」「ふと」（〃）

第二、三時（谷川俊太郎の連作「鳥羽」をまるごと）HOW

MUCHI）「鳥羽1」「鳥羽10」「鳥羽 addendum」

（谷川俊太郎）、「林檎への固執」（〃）

第四時（ことば遊びはオトナの遊び？―豊饒なことばの海

へ）

◎詩集「ことばあそびうた」全編（谷川俊太郎）、「こと

ば遊びの周辺」（〃、エッセイ）◎詩集「語彙集」より

「第9章」「第12章」「第15章」「第35章」「第61章」

（中江敏夫）◎「語は語、そのまま」（〃、エッセ

イ）

第五時（見えないものが見えてくる？―イメージネーションの

力）

◎「大きな手」（高良留美子）「淡雪」「木」（〃）◎

六、指導の経過

「言葉ともの」詩の言葉について（クエッセイ）◎
 「雨」（西脇順三郎）「天気」「皿」「太陽」（ク）◎
 「私の詩作について」（クエッセイ）

第六時到達テスト

- ◎「言葉」（安永稔和）「anonym」（谷川俊太郎）
 ◎「母国語」（飯島耕一）

時間	学習目標	授業展開	生徒の反応
1	<p>日常的な言葉の意味性、論理性を逆手に取った、散文にはみられない言語表現に触れ、その魅力を知る。（レトリックの巧みさ）</p> <p>詩人のエッセイから、言葉に対する意欲的な姿勢を読みとる。</p> <p>新鮮な表現に触れることで、本單元への関心を高める。</p>	<p>○本単元の目標を知らせる。</p> <p>○「本当」（藤富保男）の読解・音読とどこが読みにくかったか</p> <p>・日常的な言葉の通用と異なる箇所を抑える（作業）</p> <p>・それらの表現は、何を狙ったものか（他人から笑われた時の焦燥感を表現）</p> <p>○エッセイ「ぼくの背後」の読解</p> <p>○他の作品の紹介</p> <p>○本時のまとめ</p>	<p>詩の単元に入ると聞いての反応は様々であった。</p> <p>苦手意識を持つ生徒の方が多いようだった。</p> <p>音読の指名には教室がわいた。読みづらそうに読む生徒、それを聞いてクスクス笑う生徒。</p> <p>最初はなかなか意見が出なかったが、モチーフがはっきりしてからはスムーズに読解していった。</p> <p>この詩人に興味、関心を持った生徒はたいへん多かった。おおむね好評であった。</p>
2	<p>詩人の「言葉への旅」の軌跡をたどることにより、そこにみられる厳しい言葉意識をとらえる。</p> <p>生徒個人個人の多様な解釈のあり方に気づかせ、</p>	<p>〈グループ学習〉</p> <p>○教師による範読</p> <p>○初発の感想の確認（文章化）</p> <p>○班別で協議</p> <p>・初発の感想のまとめ</p> <p>・連作が進むにつれ「私」の思</p>	<p>前時とは一転して重い内容を持つ作品に、生徒は戸惑っていたようだった。</p> <p>教室は静まり返り、なかなか筆も進まない。</p> <p>グループ学習で授業を進めるこ</p>

4	3	
<p>詩人のエッセイから、ことばに対する考え方、姿勢をとらえる。</p>	<p>右同</p>	<p>それを互いに深めていく意義を理解する。</p>
<p>○「ことばあそびうた」(谷川俊太郎)の読解</p> <p>・音読</p> <p>・「ことばで遊ぶために、どんな仕掛けがしてあるか」(漢字 まじりの詩にした場合と比較)</p> <p>○「語彙集」の読解</p> <p>・「くっく」という語を幾つ書くことができるか</p> <p>・作品を示す</p> <p>・音読</p> <p>○谷川俊太郎「ことば遊びの周辺」中江敏夫「語は語、そのまま」の読解</p> <p>・両者のことばに対する関わり方の共通点 相違点をとらえる。</p> <p>○まとめ</p>	<p>○班別に発表板書</p> <p>○全体での討議</p> <p>○まとめ、他の作品の紹介</p>	<p>いはどう変化しているか</p> <p>・作業プリントに記入 (資料1)</p>
<p>とを告げると、「えーっ」という声。小学校の頃以来と言うものもいた。</p> <p>話し合いは次第に活発になっていった。班によってかなりのばらつきがあった。</p> <p>自分達の意見が板書されること がうれいようだった。</p> <p>対立する意見を軸に討議。本文に即さない恣意的な読みは取り下げられていった。</p> <p>プリントを配布するやいなやあちこちで音読する声。</p> <p>音読する生徒がつかえる度に笑い声が起こる。</p> <p>おもしろいことはわかってても、その仕組みとなかなか解明できない。</p> <p>こういったゲームには生徒が乗ってくる。作品を示すと、その量の多さと選ばれた語の特異性に大半のものが驚いたようだ。</p> <p>共通点は割に早くとらえたが、相違点については難しかったようだ。</p>		

6	5
<p>本単元を通して学習したこと(特にことばに対する考え方に深化がみられたかどうか)を確認する。</p>	<p>詩的言語の特徴の一つである多義性(イメージ喚起力)について理解を深める。 ことばに即して自己のイメージを膨らませるといふ、詩を読解する上での原則について知る。</p>
<p>○到達テストの配布 ○本単元のまとめ</p>	<p>○高良留実子「大きな手」の読解(展開法) ・「7行目にはどんな詩句がくると思うか」 ・「大きな手」ということばに暗示されているものは何か ← イマジネーション⇌現実をとらえる力となる ○西脇順三郎「雨」の読解(展開法) ・「柔らかな女神」のような雨は、何を「ぬらし」ていくだろうか ← イマジネーション⇌現実をとらえる力となる ○高良留実子「ことばともの」詩のことばについて、西脇順三郎「私の詩作について」の読解 ○まとめ</p>
<p>テストにはほとんどの生徒が熱心に取り組んでいた。時間が不足した生徒については、後で提出させた。</p>	<p>一連を示すと、その内容の異様にざわつく生徒が多かった。「鼻をそぐ」「首を絞める」は割にスムーズに出てきた。七行目の詩句については多様な意見が出た。自らが加害者に回る、という内容の詩句を出したものは少なく、最後に正解を板書するとため息まじりの声ももれた。 「()をぬらした」に入るものを連想していったが、自分達の発想と詩人のそれとの落差に少々あきれかえり、不平を漏らすものもいた。 最終行の「私の舌をぬらした」では、評価がまっぶたつに分かれた。</p>

三、実践の反省

各々の教材に対する生徒の反応は、おおむね良好で、現代詩の新鮮な表現と、詩人達のことばに対する取り組みの姿勢が、彼らにことばというものについて考える契機を与えてくれたと思う。(資料2、3、4) 現代詩が言語教材としての豊かな可能性を秘めていること、明確な目標のもとに教材を編成し、機能させていくことの有効性を知らることができた。

ただ、授業を進めるうちに、詩の読解を、性急に単元の目標と結びつけてしまうことの危険性も感じた。それぞれの教材ごとに、その詩の持つ特質に応じた授業展開を工夫していく必要がある。生徒を「詩」に出会わせ、更に次なる出会いへと導く手だてを取ることが大切であろう。

今回の実践は、「生徒のことば意識の錬磨」がその大きな目標の一つであったが、ことばの限界性を知り、その深淵をのぞいた生徒に対し、それに抗していくだけの表現への意欲と力量を与えることが、今後の課題となるであろう。(資料5) また、その一方で、詩人の鋭く厳しいことば意識を自分の問題として考えず、他人ごととして受け取った生徒もいる。(資料6) 生徒を授業のなかで表現という場に立たせる工夫も必要だったのではないかと。現代詩が現在直面している、語るべき主題の喪失は、彼ら学習者にも共通しているのであり、今回のいわゆる「主題なき詩」への反響が、単に、思い悩まずにすむという理由からくるものではない

るのである。

四、おわりに ― 今後の展望

現代詩の世界は教材の宝庫であるように私には思える。今回取り扱った言語教材としての価値の他にも、その批評性、学習者と共有する同時代性など、多くの教材的価値を見いだすことができる。より良い教材を発掘し、自主単元編成の試みを、今後も続けていこうと思う。

けれど一方で、教科書教材についての不満は残る。教科書教材のなかで戦後詩の占める割合がかなり低いことは、残念でならない。明治以来の詩の歴史は百年あまり、そのうちの四十年は戦後詩の歴史である。詩史的評価の定まっていない詩であっても、生きのいい、生徒の心によく響くような詩は採録してほしいと思う。

今、現代詩が立っている地点と詩教育の現場の間には、かなりの隔たりがあるように思える。例えば一九六〇年代以降に現われたへんらかの外的・内的な主題を言語で表現する詩ではなく、言語そのものの多様で魅力的な発現ないし創出を目的とし、そうした言語の発現形態ないし創出形態そのものが作品と呼ばれるような詩¹⁾は、まったくと言っていいほど教科書に採録されていない。誤解を恐れずに言うならば、現在教科書に採録されている詩の特徴は、(わかりやすい)ということである。教師にとっては指導が比較的容易な詩、生徒にとっては理解しやすい(ここで言

う「理解しやすい」とは、内容が浅いという意味ではなく、作品の主題にいたる道筋をとらえやすいという意味である。詩が多いのではないだろうか。いわゆる「意味性」（認知的側面）を重視した教材の編成がなされているように思えてならない。確かにそのなかに深い思想をたたえた詩教材は、高校生である彼らにとって高い教材的価値を持つものであり、与え続けることの意義は大いだが、しかし、そのような傾向の詩ばかりを扱うことが、詩の多彩な魅力、ことばのもつ力を知ることになるだろうか。扱いたい詩のなかにも、優れた教材価値を持つものがある。教材化の困難な詩を切り捨てることで、詩の授業を矮小化させることがあってはならないと思う。「わけがわからない」から駄目、では寂しい。「わけがわからない」けれどもおもしろい場合も確かにあるのだ。現在の私には、それらの詩群を教材化する力量はないけれど、教材化への試みを続けていくことが、詩教育の内実をより豊かなものにしていくのではないかと思う。

単元学習を行うなかで、「詩で教える」位相の重要性、有効性は十分確かめられたが、同時に「詩が教える」位相の重要性も痛感した。補助プリントに載った作品を読み、その詩人の詩集を借りたいと申し出るものや、詩作への意欲を持ち始めたものも多かった。今後、機会を見つけては生徒達に詩の紹介を続けていこうと思う。

授業の展開にしても、いたずらに教材を切りきむのではなく、詩の材質を生かした授業展開をしていきたい。生徒の多様な解釈を保証しつつ、生徒に「生きる武器」を与えたい。

いつになったらそんな授業が実現するだろうか。当分の間私は、「詩で教える」位相と「詩が教える」位相の間をふらつききうである。

1 小海永二「日本戦後詩の展望」第8章 詩の言葉と言

葉の詩」P二七二頁（研究社叢書）

（宮崎県立小林高校教諭）

〈谷川俊太郎・連作「鳥羽」をまるごと How Much〉

＝ 作業プリント ＝

組

班

▽連作全体から受ける印象

・孤独な感じを受けるけれども言葉がやさしく書かれている。
 ・なにかが私の心にのしかかってくる。私にはとてもささえきれない。
 ・詩の中で「くしない」とか「くない」とかいう否定の意味の言葉が多く使われているが、この作者は人生に対して否定的になっているのではないか。そして詩人である自分を無力なものとして受とめている。

▽連作が進むにつれ、「私」の思い（特に「言葉」に対する）に
どんな変化がみられるか。

鳥羽 2

鳥羽 1

今の状態に満足している。

鳥羽 3

自分の言葉はすぐに消えてしまいそうで不安になっている。自分の心も言葉と同じようにもろくなっている。

裕福に生きてきた自分が、つらい人生を生きてきた老婆に
対して、私の言葉は何もならないが、自分の今までの生き方
を否定することはしない。

鳥羽 4

満足してきた自分の人生にふとした不安が現われ自分が死んだあとの詩の言葉はどうなるだろうと思っている。言葉に対する愛着は今もなお残っている。

鳥羽 5

言葉の姿は見えるが、自分の心の中の言葉の存在がどういうものなのかは全くわからない。

鳥羽 6

心と心の通じあいに以上言葉を求める情熱がわいてきている。

鳥羽 7

口をつぐんで言葉を使わないことによって正直に近づこうとしている。

鳥羽 8

自分の気持や考えを言葉でしか表現できない。人目にさらされるこの詩が自分ではすぐれていないとわかっているが、この詩をこの言葉以外で表現できない。

鳥羽 9

言葉をどんなにいい加減に考えようとも作者の言葉に対する思いは大きい。

鳥羽 10

言葉に対する愛着がわき、今までとはちがって言葉を素直に受けとろうとしている。

鳥羽 11 addendum

言葉はとも尊いもので簡単に自分の手に入れることのできないものである。

資料 ②

〔資料2〜6は到達テストの生徒の答案（感想）である。〕

「ことばの実験室」

私は昔から詩というものは、心情とか、風景とか、とにかく美しい物を目に見るようにかいてあるものだ、と思っていた。

しかし、今回の詩の授業でその考えは一べんでひっくり返されてしまった。ほとんどと言って良いほど、わけが分からず、あの多くの詩のなかで一つも理解できなかったような気がする。

最初の時間の詩は強烈だった。作者は精神分裂者ではないかと疑った。でも授業の中で作者の言葉に対する思いというものが、ほんの少しだったが分かった。言葉というものを巧みに使い、自分独特の言葉で、言葉の意味のはばを広げているのではないかなあ、と思った。

今回の授業で、私達が日常使っている言葉の、不思議な力にふれることができたので、大変良かったと思う。

資料 ③

詩は、難しい表現で殻をつくっていて、なかなか言葉の中に隠された意味をくみとることができなかった。けれども、いったん、詩人がその詩の中で表現したかった本当の意味が分かると、詩はどんどんふくらんで、まさに詩の世界を作った。特に、鳥羽の詩は難しく初めて読んだときには、何がだかさっぱり理解できなくて、ほんとうにこの詩からなにが分かるんだろうかと思った。そして、二時間の授業の最後で全体の内容がはっきりした

とき、初読の感想とのあまりの違いに驚いてしまった。また、グループごとの授業で皆の色々な意見が聞けたのも楽しかったが、詩というのは読む人によって随分と受けとり方がちがって、そこがまたおもしろかった。それだけ、鑑賞する方に多くのことを考える余地が残されているのだと思う。たまたに詩を授業でやるのも新鮮で、普段ほとんど言葉というものを考えないので、本単元はそれを考える良い機会となった。

資料 ④

これまで出会ってきた詩はすべて、言いたい事は、これだ！と見るからにわかるような詩が多かった。しかし、今度の詩はそうではなかった。最初に読んだ時、何がだか分からなかった。しかし、何とも何とも読んでいくうちに、これらの詩には、何か深いものがあるように感じた。そしてそれは、詩人の心であり、詩人の鋭い視点であるように思えた。

私は、この詩人たちが本当にうらやましいと思う。それは、この何の変化もない平凡な生活の中の、見すごされてしまいそうな事をじっと見つめ、そして鋭い視点から眺め、豊かな表現力で表わしているのは、本当にすごいと思う。詩というのは、形式などにこだわらず、自分の心に正直に書くと、ステキなものができると思う。

資料 ⑤

今回の授業で私が感じたことは詩のすばらしさではなく、言葉

の恐ろしさであった。言葉というものは、私達によって生み出され私達の意志により使われているようでありながら実に自由自在にその姿をかえて人をまどわしていると思う。それが漢字でかかっているかひらがなカタカナかで、そのイメージは大きく違し、ぱっと瞬間に見た時のインスピレーションというか、そのものの意味からではなく全体から投げかけてくる印象は以外と強く私達の心に残り、それが文章のなかで文の流れとは別に勝手に躍ったりしてしまう。

私自身詩を書いていてもまた手紙を書いていても自分の心と言葉による表現にいつも泣かされているのだけれど、そんなものだろうとあきらめてしまうか、よい言葉を探ろうとするのか、これはなかなか難しい問題であって一度とりつかれると逃げられなくなりそうでもとてもこわい。しかし、言葉の無限性こそが詩作をすばらしいものに行っていると思う。

資料 ⑥

流れてゆくのだと思った。時とともに、詩の型までも流れてゆくのだと。

型が変わるのは、というよりも、新しい型ができるというのは良いことだと思った。少なくとも私にとっては良いことだ。親しみ易い。

言葉に対しての作者たちの苦悩。言葉を大切に行っている。言葉を大切に扱う人たち。言葉とは大切に使われるのがよいのだろうと思う。しかし、使うのに、あの作者たちのように深く考える気

はサラサラ無い。身動きがとれなくなってしまった。

詩は、今まではほとんど読んでいない、頭を使わねばならないからだ。想像しなくてはならないからだ。疲れるのは嫌だ。けれど、たまには疲れるのもいいかもしれない。などと思った。